



鳥 25 (99) 1977 年より転載

3 代会頭 内田清之助 UCHIDA Seinosuke

1884 (明治 17) – 1975 (昭和 50). 会頭在任期間 1946 – 47

唐沢孝一 (都市鳥研究会)

1884 年東京市京橋区 (現・中央区銀座) で生まれる。銀座生まれの内田が鳥学と出会い、後に鳥獣行政に携わることになった経緯は、松山 (1988) によれば次の通りである。1906 (明治 39) 年に内田は東京帝国大学獣医学科に入学、その後大学院で寄生動物学を専攻することになり飯島 魁教授 (初代会頭) と出会い、飯島の勧めにより鳥学へと進むこととなった。1908 年東大卒業後、東大副手、講師の傍ら農商務省による「野生鳥獣ノ調査」「有益鳥獣ノ調査」「家畜家禽ノ寄生虫ニ関スル調査」などに携わる。折から 1918 (大正 7) 年には、農商務省による「狩猟法改正」がなされ、「農林業上有益な野生鳥獣の保護繁殖と狩猟鳥獣の利用増殖」を目的とした「鳥獣調査事業」が始まった。内田はその総括・指導のため農商務省技師に任ぜられる。鳥学者であると同時に卓越した行政官としての内田はこうして誕生した。

内田は鳥獣調査事業推進にあたり、「鳥」創刊号で飯島会頭が今後の日本の鳥学の方向性として提唱した「生態学・応用鳥学ノ必要性」及び「地方在住ノ同好者諸君ガ此問題解決ニ向テ最適ナル位置ニアル」の教えを継承・実践した。即ち、全国各地の研究者、宮内省・農商務省・水産庁の出先機関、学校 (旧制中学・師範学校)、海上保安庁 (灯台) などに調査を委託し、鳥獣の分布、渡り、繁殖、食性、個体数変動、鳥獣保護等に関する膨大な情報を収集した。その成果は『鳥獣調査報告』『鳥獣彙集』『鳥獣報告集』として刊行している。筆者は『鳥獣報告集』の復刻版 (1998) 刊行の監修にあたる機会に恵まれたが、調査者の中に和田干蔵 (青森県立師範)、仁部富之助 (農事試験場陸羽支所)、川口孫次郎 (福岡県立中学校)、中村幸雄 (山梨県学務部) など、当時各地の第一線で活躍している研究者が名を連ね、しかも大正末～昭和初期の旧制中学 (500 校)・師範学校 (100 校) の博物学・生物学教師に参加を呼びかけ、その調査態勢は注目に値するものがある。明治以降、欧

米から移入した学問が定着し、かつ地方に分散した成果を見る思いである。内田らの情報収集の手法は、調査員からの年度末の鳥獣季節報告に加えて、葉書や手紙、電報等で随時報告を可能とし、報告された生データを時間系列順に掲載するものであった。「生データをそのまま集積することにより、後世の研究者はこれらの情報に対し各自の新しい視点で見直し、自由に分析できる」(唐沢 1998)、という利点がある。内田は標識調査を通して鳥の渡りの解明にも貢献しており、日本に於ける鳥類標識調査事業 (1924 年) の創始者でもある。

初代会頭飯島との出会いが内田の鳥学へ進む契機になったこともあり、内田は日本鳥学会の創立と学会運営に深く関わることとなった。1912 年、学会発足時の 7 名の創立会員の一人である。松山 (1976) によれば「学会発足は飯島先生がご発議になり、内田先生が肝入りで明治 45 年 5 月 3 日に発会」「学会誌鳥創刊号は内田先生が編集」「会務・会計の一切は内田先生がご担当」など、学会創設とその後の運営に重要な役割を果たしたことが読み取れる。

内田は初代飯島会頭をはじめ二代鷹司会頭のもとで会の運営や編集の実務に携わり、第二次大戦後の混乱期に鷹司会頭の後任として三代会頭 (1946 – 47 年) に就任し、戦後の困難期 (学会誌「鳥」も休刊した時代) に学会再興を期すなど、学会の土台を支えた。

内田は行政官や学会役員とは別に、個人として鳥に関わる多数の著書を著しており鳥学の普及に貢献した。『日本鳥類図説』(1913 警醒社書房)、『鳥類講話』(1917 裳華房) (1925 年『鳥学講話』となる) は古典的名著として評されている (黒田 1976)。また、優れた随筆家でもあり、『鳥と旅』(1973, 芸艸堂) は昭和十年代に各地を旅して観察した鳥獣の生息状況を記した回想記であり、戦前の鳥相を理解する上での貴重な資料である。